

# 生態学的視覚論からみた発達障害の理解

Developmental Disorders viewed upon the Basis of the Ecological Theory of Visual Perception

山下稔哉<sup>1)</sup>、上原奈緒子<sup>1)</sup>、金子宏明<sup>1)</sup>、吉兼伸子<sup>1)</sup>、安田風明<sup>2)</sup>、崎山幸美<sup>2)</sup>、  
安永正則<sup>2)</sup>、岩城 淳<sup>2)</sup>、内田聡子<sup>3)</sup>、林 隆<sup>4)</sup>

Toshiya Yamashita, Naoko Uehara, Hiroaki Kaneko, Nobuko Yoshikane, Kazeaki Yasuda, Yukimi Sakiyama,  
Masanori Yasunaga, Jun Iwaki, Satoko Uchida, Takashi Hayashi

## Abstract

Perceptive features of developmental disorders are discussed on the basis of the Ecological Theory of Visual Perception proposed by Gibson, J. J. Gibson's theory insists that natural light in the environment is so organized that no brain-based data processing is needed to accomplish visual perception. This theory seems to match the perceptive features of developmental disorders which are assumed to optically perceive the environment "as it is". People with developmental disorders seem to perceive affordance quite differently compared with the majority of people with no developmental disorders. This might be the reason of the difficulty of daily living which people with developmental disorders are forced to manage. Gibson's theory clearly indicates that, whether with developmental disorders or not, no superiority or inferiority exists among the perceptive features of every person. To be fair, the majority of people are required to understand and respect the way people with developmental disorders perceive the world.

## 要約

Gibson, J. J.の生態学的視覚論に基づいて、発達障害のある人たちの知覚世界を考察した。光は環境の中であらかじめ構造化されているため、視覚が成立するうえで脳の情報処理は必要ないとするGibsonの理論で示される世界観は、世界を“ありのまま”に知覚していると考えられる発達障害のある人たちの認知特性と親和性が高いと考えた。発達障害のある人たちのかかえる日常的な生き難さは、そうでない多数の人たちが環境内に知覚するアフォーダンスとは異なる独自のアフォーダンスを知覚することに起因するという視点から説明が可能である。Gibsonの理論は、発達障害のある人とない人の知覚に差異はあっても優劣は無いことを明らかに示していた。Gibsonの理論は発達障害のない多数派の人たちに、発達障害のある人たちの知覚世界を理解し尊重する姿勢をもつことを求めているようにも解釈できる。

Key words : the Ecological Theory of Visual Perception, developmental disorders, affordance, Gibson, J. J.

Key words : 生態学的知覚論、発達障害、アフォーダンス、Gibson, J. J.

## I. はじめに

James J. Gibson (1904–1979) は、ニューヨークのコーネル大学を拠点に、視覚認知が成立する仕組みの解明に取り組んだ認知心理学者である。半世紀を越える研究によってGibsonが構築した理論は生態学的

視覚論とよばれる。Gibsonの生態学的視覚論は膨大な質的研究の成果であり、知覚理論としてきわめてユニークなものである。しかしそれ以上に重要なのは、Gibsonの知覚理論が、現在ひろく受け入れられている量的基準によって客観的に現象を把握する方法論を問い直す性格を備えている点である。

<sup>1)</sup> 山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士後期課程

<sup>2)</sup> 山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士前期課程

<sup>3)</sup> 医療法人社団たはらクリニック

<sup>4)</sup> 山口県立大学大学院健康福祉学研究科

量的な現象把握法の要点は、『ある対象や環境に対して、量的基準を用いて操作や測定を行えば、行為や観察の主体に関わりなく、同一の結果が生じ、同一の記述を行うことができる』とする点である。特定のアドレスを入力すれば誰が操作してもパソコン上には目的のウェブサイトが立ち上がるし、精密に手順を制御すれば大陸の間を飛行機で繰り返し行き来することも可能である。主体の影響を排除して操作的に再現性を保証することで、科学技術に飛躍的な進歩をもたらしたのが量的な現象把握法の成果である。

Gibsonの知覚理論は、これとはまったく異なる立場をとる。その要点は、『ある対象や環境と関わる際に、行為や観察の主体が異なれば、対象や環境が主体に提供する意味もまた異なる』とする点である。この発想は、近代以降の哲学や心理学で主流をなしてきた認識論を転倒させるほどに革新的なものであり、心理学、認知科学ばかりでなく、ロボット工学、教育学、美学、社会学、社会福祉、建築などの様々な分野において有益な視点を提供するものとして深く受容されつつある(河野, 2005)。

私たちは、Gibsonの知覚理論から、発達障害のある人たちの知覚世界を理解するための重要なヒントを得ることができると考えた。発達障害のある人たちは、そうでない人とは異なる意味や価値を知覚している可能性があることを、Gibsonの知覚理論は強く示している。彼は生涯に100を超える研究論文と3冊の書物を著した。そのなかでも、彼がその生涯を終えた1979年に出版された“The Ecological Approach to Visual Perception”(邦訳:生態学的視覚論)に、Gibsonの思想が集大成されている。本論では、この書物で取り上げられている諸概念を参照しながら、Gibsonの知覚理論を通して、発達障害のある人たちの知覚世界を理解することを試みる。

## II. 視覚認知と発達障害

### 一 環境をあるがままに見る一

#### 1. 視覚の成立に脳内の情報処理は必要ない

Gibsonは“刺激としての光”と“情報としての光”を区別すべきだと主張した。Gibson以前の視覚研究は、“刺激としての光”を対象にして行われてきた。“刺激としての光”は、強度や波長などの物理量で記述できる意味中立的な存在である。意味中立的とは、物理量以外の固有の情報を備えていないということである。この場合、視覚認知が成立する仕組みは以下のよ

うになると想定される。まず物理的刺激としての光が網膜に到達し、視細胞を興奮させる。その興奮が視神経を伝わる電気刺激として脳に送られる。多数の視細胞から送られてきた電気刺激が脳内で統合されて視知覚が構成される。この図式で想定されたのは、脳内の情報処理が視知覚を生み出すという仮説であった。

しかし、Gibsonは「われわれは刺激によって与えられる光の感覚を持つことはない。個々に分離して関連性のない刺激に関する学説は、日常の視覚に適用するわけにはいかない」として“刺激としての光”を基盤とした視覚研究を退けた。そして「日常の視覚が受け取る光は常に構造化されていて固有の情報をもっている。それをピックアップするだけで視知覚は生じる。情報は環境のなかにすでに存在しており、視知覚が成立するうえで、脳内の情報処理は必要ない」として、あらかじめ構造化された“情報としての光”が視知覚の基盤を形作っていると主張した。Gibsonの主張は、従来の脳を基盤とした視覚理論を転倒させ、「情報は環境の中にある」とした点で画期的であった。

#### 2. 情報は環境の中に、言葉の前にある

図1に示すように、さまざまな自然物の表面は、いずれも完全に均一ではないが、全く無秩序でもない。このような自然物の表面に生じる凹凸の配列を肌理(texture)という。肌理は自然のなかで光の配列が構造化されている証拠である。Gibsonは肌理が備える情報の豊かさに着目した。肌理は自然の中のあらゆる物の表面にあり、生物が暮らす環境のなかでミリメートル単位から数キロメートル単位まで、入れ子になって存在している。地面の草に目を近づければ、葉の表面の肌理が葉の滑らかさの程度や反り具合を特定する。目を離していくと、多数の草が作り出す肌理が草叢の広がりや奥行を特定する。さらに目を離すと、草叢の肌理とその上方に立ち並ぶ木々を作る肌理の違いが、林の中の異なる階層を特定する、さらに離れて航空機の位置に視点を置けば、林や湖面や荒地の肌理の違いが大規模な環境の構造を特定する。肌理は、対象に接近しても環境から距離をおいても見える。移動すると、いま見えている肌理に隠されていた別の肌理が現れる。肌理はさまざまなレベルでものの表面を特定し、互に入れ子になり、つながりあい、重なり合いながら、さまざまな配置(レイアウト)をなして環境に関する情報を形作っている。Gibsonは、「自然環境のあらゆるレベルに存在する肌理とレイアウトのなかに環境の意味や価値を特定する情報が埋め込まれ

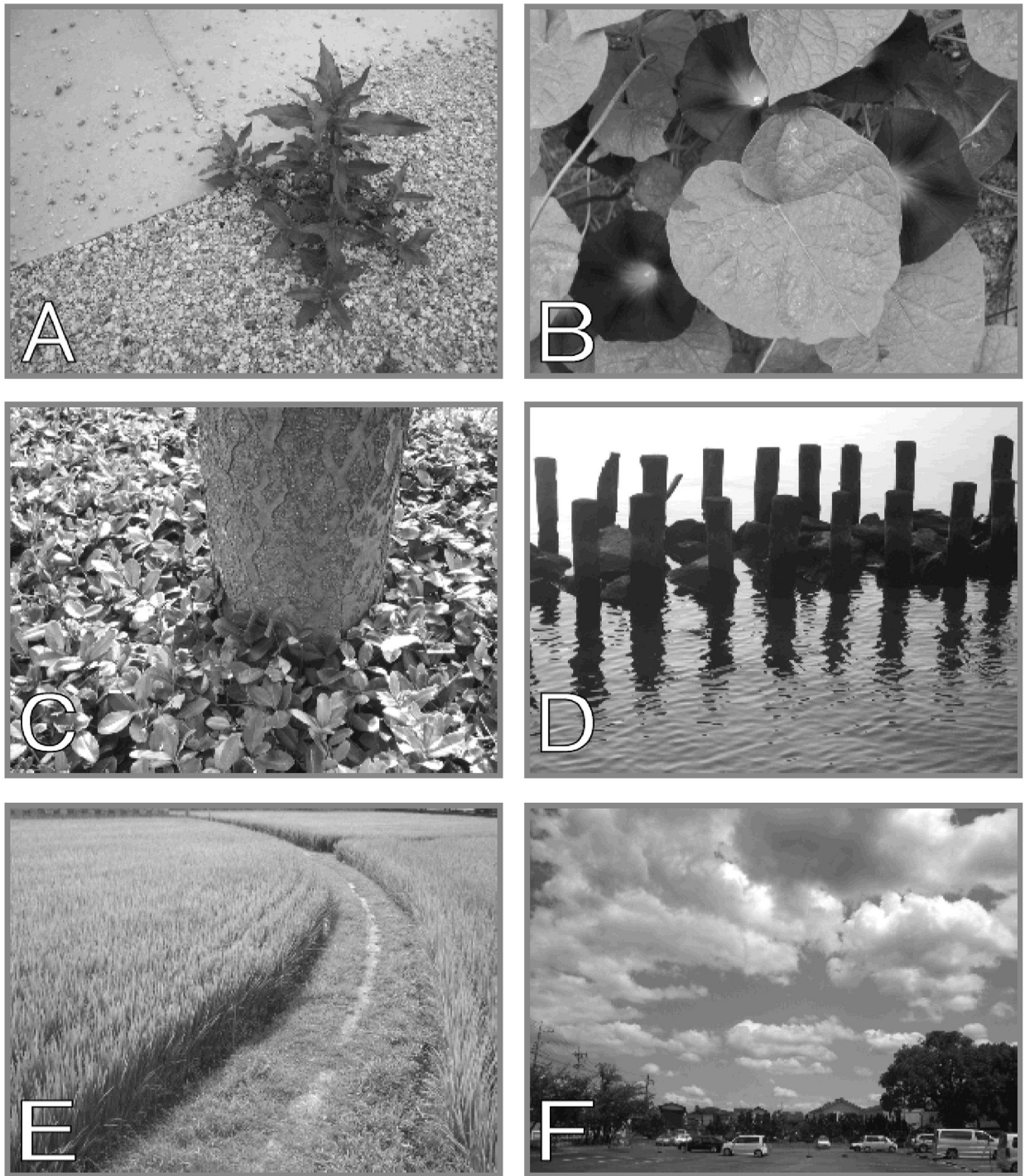


図1 肌理 (texture)

肌理は自然のなかで光の配列が構造化されている証拠である。肌理の違いや配列が対象の性質や配置を特定する。A：mm単位の肌理。砂粒とコンクリートの肌理の違いが両者の質的差異を特定している。B：mm単位の肌理。アサガオの葉面と花びらの肌理の違いが両者の質的差異と配置を特定している。C：cm単位の肌理。植え込みの葉が作る肌理と街路樹の幹の肌理が両者の質的差異を特定している。植え込みの葉の肌理が秩序をもって細くなることで、視野の奥行も特定されている。D：cm単位の肌理：水面の波が作る肌理が秩序をもって細くなることで視野の奥行を特定している。E：cm～m単位の肌理：稲の作る肌理と畦道の雑草が作る肌理の違いが両者の質的差異を特定している。両者の肌理が秩序をもってカーブしながら細くなることで、視野の奥行と水田や畦道の形態が特定されている。F：m～km単位の肌理：不定形な雲の配列が秩序をもって細くなることで、視野のマクロな遠近感が特定されている。

ている」と考えた。そして、「肌理とレイアウトを知覚することが、自然のなかで動物が生きていくうえで決定的に重要だ」と主張した。

Gibsonの視点は、言語を通して認識される前の世界を明らかにしている点で斬新である。Gibsonの知覚理論を日本に取り入れるうえで先駆的な役割を果たした佐々木(2003)は次のように述べる。「これまで人は、周囲にあることを物とよんできた。物には他との境界がある。だから1つずつ名前をつけられる。人は物を発見しては名前をつけてきた。人はさらに、物の輪郭を平面に表現する遠近法という技術を発明した。人は輪郭と言語、この2つで世界を明晰に記述できると考えてきた。しかし周囲にあることがレイアウトだとすると、世界を区切るこの方法は無効になる。なぜならレイアウトには輪郭がない。入れ子しているレイアウトに名前をつけることには無理がある。顔と皮膚という言葉でレイアウトを区切ると、顔を顔に見せ、皮膚を皮膚に見せているレイアウトが連続しているという事実が無視されてしまう」。佐々木は、Gibsonの知覚理論に従えば、連続している環境を区切って名前をつけるやり方には本来的に無理があると主張する。

### 3. 発達障害の視覚世界

このような視点は、発達障害のある人たちの知覚世界を理解するためのヒントを与える。自閉症の人は視覚優位の特性を持ち、視覚的、具体的、個別的な事象や概念には意味を見出しやすいが、抽象的、表象的なことは意味・概念になりにくい(日本自閉症スペクトラム学会、2005)とされ、言語発達が遅かったり発話がなかったりすることが、自閉症の障害特性のひとつとされている。しかし、Gibsonの知覚理論に基づけば、ある言語に依存して世界を捉える知覚様式は、本来連続的で切れ目のない環境に恣意的な区切りを入れることでひとつの枠組みを与えたものに過ぎず、さまざまな世界の区切り方の一例を示しているに過ぎないとみなすことができる。一方、言語を介さずに、視覚で直接的に世界を捉えるやり方は、環境を恣意的に区切ることなく、あるがままにとらえることができる知覚様式であると考えられる。

自閉症者であり全米の家畜施設の設計を手がけるGrandinは、「ふつうの人は状況があるがままの姿で見ずに頭の中で抽象化し一般化した概念を見る。これに対して、動物や自閉症を持つ人は概念には目を向けず実際にあるもの自体を見る」と述べ、

『まぎれこんだゴリラ』という実験を紹介している(Grandin&Johnson、2005)。実験では、バスケットボールの試合で1チームがいくつパスを出したか数えるよう被験者に指示して録画したビデオを見せた。テープが流れてしばらくすると、ゴリラの着ぐるみを着た女性が画面にあらわれ、立ち止まり、カメラに顔を向け、こぶしで胸を叩いた。ところが、ビデオを見た後に「ゴリラに気がつきませんでしたか」とたずねると、被験者の実に50%がゴリラに気付いていなかったのである。一般化した概念に従って世界をとらえる知覚様式では、一般にはあり得ないものを見るのが困難になる。Grandinは、「目で見て考える人間だったら、この実験でゴリラを見る可能性は言葉で考える人間より高いだろう」と述べている。

発達障害のある人は、そうでない人と比べて認知特性が偏っていたり、認知の発達が遅れていたりすると考えるのは早計である。発達障害のある人たちは、そうでない人たちが見ていない本当に多くのものを見ていいる可能性がある。Grandinは幼児期を振り返って、「私は浜辺に座って何時間も指の間に砂をさらさらと落としながら、いろいろな形の山を作るのに飽きなかった、砂粒のひとつひとつが顕微鏡をのぞいている科学者のようにわたしの心をとらえて放さなかった。また、あるときは、自分の指に刻まれた線を、地図の路線を調べるように観察した」と述べている(Grandin&Scariano、1986)。形を変えながら盛り上がりながら崩れる砂の流れや、深く浅く重なり合いながら刻まれた指紋のつながりに魅了される様子は、周囲の環境と切り離されて自分の世界に自閉する姿ではなく、環境があるがままに認知するために欠かせない肌理やレイアウトに強くひきつけられる姿としてとらえることができる。そのような体験に名前をつけることは困難である。言葉は、環境のなかに無限に存在する視覚情報のなかで、自分たちに都合のよいものだけに名前と概念を与えて強調して、それ以外のものを見ないですむようにする方便ということもできる。発達障害のある人が言葉にする内容は、彼らが言葉を介さずに知覚している内容のごく一部に過ぎない可能性がある。その背景にある知覚世界がどれほど豊かなものなのか、言語と概念で世界を区切ってとらえる知覚様式を持つものには想像も及ばないというべきかもしれない。

### Ⅲ. アフォーダンスと発達障害 —独自の環境の価値を見出す—

## 1. 知覚されるアフォーダンスは主体によって異なる

Gibsonが生み出した概念にアフォーダンスがある。アフォーダンスという語はアフォード (afford: 提供する) という言葉からGibsonが作り出した造語で、その意味は「環境が動物に提供するもので、良いものであれ悪いものであれ、環境がそこに関わる動物に提供する価値」とされる。Gibsonによれば、動物は、単なる情報だけでなく、環境から意味や価値を読み取っているという。「動物が環境の中に見出す意味や価値がアフォーダンスである」ということもできる。

例えば、地面のような硬い水平な面は動物が歩いたり走ったりすることをアフォードするが、同じ水平な面でも硬くない湖などの水面は、歩いたり走ったりするための支えをアフォードしない。横向きの深い穴は隠れることをアフォードするので身を守るという価値を提供するが、下向きの深い穴はその中に落下することによって命を失う危険をアフォードする。こうしたアフォーダンスを知覚することは、動物が生きていくうえで不可欠である。

さらに重要なのは、同一の環境であっても、主体が異なれば認知されるアフォーダンスも異なるという点である。例えば、電車は多くの人に対しては乗って移動するというアフォーダンスを提供する。しかし鉄道ファンに対しては、乗って移動するだけでなく、その外観、機能、エンジン音、年式や様式の差異を細かく区別して楽しむ機会を多彩にアフォードする。一般の人にとってはただの動く金属の箱であっても、鉄道ファンにとっての電車は、嬉しさや高揚感といった心的状態変化さえアフォードする対象である。環境は多様なアフォーダンスを備えているが、主体が異なれば、同一の環境であっても、そこから取りだされる意味や価値、すなわち環境のアフォーダンスは全く異なるとするのがGibsonの知覚論の要点である。

## 2. 発達障害が知覚する少数派のアフォーダンス

このような視点は、発達障害のある人たちの知覚世界を理解するためのヒントを与える。前出のGrandinは、小学生時、よく毛布で身体をくるんでソファの下に潜り込んでいたという (Grandin&Scariano, 1986)。当時、彼女には体を押しつけるような触覚刺激への渴望があり、それを満たすために毛布とソファが提供するアフォーダンスを利用したのだと思われる。アフォーダンスは価値を含む概念であるため、その社会で多数派の特性を有する人が認知するア

フォーダンスが正常とされ、少数派の特性を有する人が認知するアフォーダンスは正常ではないとされる可能性がある。当時Grandinが採用したアフォーダンスも、周囲の目には奇妙なものに映ったであろう。しかし、Gibsonの知覚理論に従えば、主体が環境から知覚するアフォーダンスは、本来、主体の認知特性が異なれば異なるのであるから、あるアフォーダンスの認知が他と異なるから正常でないということではできない。当時のGrandinは毛布とソファの下に、彼女の心理的な安定に不可欠な圧迫刺激を得るうえで最適なアフォーダンスを見出していたということができる。

1) 危険のアフォーダンス：発達障害の衝動性が問題にされることがある。ある子どもは、高いすべり台の上に登って50cm四方の足場の上で活発に飛び跳ねる。周囲にいる人には、その行動が衝動的で危険な行為に見える。しかし、高い場所にある50cm四方の足場が危険をアフォードすると判断するのは、多数派の認知特性をもっているからなのかもしれない。「アフォーダンスを知覚することは、動物が生きていくうえで不可欠である」と述べた。高いすべり台のうえで飛び跳ねている子どもは、これまで生きてこられたのだから、自分にとって不可欠な安全と危険のアフォーダンスを、発達障害に特有な知覚様式によって、的確に認識できていると考えることもできる。本当のところはもちろん知るよしもないが、発達障害の認知特性を持つ子どもにとっては、50cm四方の足場でも十分に安全をアフォードすると知覚されているかもしれないし、発達障害に特有のやり方で実際に安全を確保できているかもしれないのである。ちなみに大多数の人は50m四方の安定した足場であれば、地上数100mのところでも、平気でジャンプするし、そのことに通常は危険を感じない。

2) 対人関係のアフォーダンス：新しい環境への適応の難しさが問題とされることがある。特に自閉症の特性がある発達障害では、程度は様々であるが、初対面の人との関係が苦手なのが一般的である。それが障害特性のひとつとされている。確かにわたしたちは、学校で、職場で、地域で、初めて会う相手とでも速やかに関係を結ぶよう求められる。しかし、日本人の多くが日常的に新たな対人関係を結びながら生きるようになったのは、せいぜい20世紀以降のことであり、長い日本の歴史の中で、それはきわめて異例の出来事である。それ以前の日本人は、数十～数百人程度の集落を単位として、比較的人の出入りが少ない閉鎖的な人間関係のなかで暮らしていた。現代でも、山間地の農

## 発達障害児をもつ保護者の方へ

### ■災害時に考えられること

知的障害など発達の問題をお持ちのお子さんの特徴として、環境適応が苦手、環境変化に弱いことが言われます。災害は私たちにとって大きく環境を変えます。変わるはずのないものが変わり、起きるはずの無いことが起きることが災害です。その意味では、極論すると、発達障害のある子ども達は日常的に災害のような事態を経験しているようにも思えます。

災害下において、発達障害のある子ども達は発達障害でない大人よりもずっと冷静であるということを経験し、保護者のみなさんは信じてください。災害下でも、その環境変化そのものは発達障害のある子ども達にとって、それほど負担ではないと思って（思い込んで）、子どもさん達に接してください。

### ■お子さんに生じること

避難所の生活の環境は、お子さんにとって分かり易いものと思います。生活する場ですので、本音と建前の落差が少なく、結果的に発達障害児にとっては、負担が少なくなっている環境と言えるかもしれません。

### ■お子さんへの具体的な接し方

子どもの適応能力を信じましょう。お子さんは、普段から生き難さを感じながら、頑張って暮らしていると思います。ですから、非常事態でも普段と変わらない対応力を潜在的に持っており、できるはずです。

子ども達が「極端」な環境変化には強い、ことを信じて、子ども達の行動や態度を頼もしいものと思ってください。何があっても動じない顔つきを、心の支えにしてください。これまで大切に育ててきたお子さんを、今こそ頼ってみてください。

誰もが考えなかった災害時に、発達障害の子ども達がこれまで平時の世界で学んできたことが役に立つと思います。何とかしないといけない困った子ではなく、有事に強く立ち向かう子どもとして、精神的にも肉体的にも頼れる存在であるということを保護者の皆さんに伝えることが最大の支援だと考えます。

文責：精神保健研究所 知的障害部 稲垣真澄

山口県立大学 看護栄養学部 林 隆（知的障害者研究部客員研究員）

資料1 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センターHPより転載（抜粋）

山村に、そのような生活形態の名残を見出すことができる。そのような環境の下では、初めて出会う見知らぬ人物は、危険をアフォードする可能性のある存在として知覚されていたと考えられる。ほんの1世紀ほど前までは、日本人にとって、初対面の人を避けようとする認知・行動特性は、身の安全を確保する上で欠かすことのできない特性であったということもできる。従って、初対面の人に安全感をおびやかすアフォードンスを知覚して接触を避けるのは、生物としての日本人にとってはむしろ自然な反応であるということができる。さらに、初対面の人と仲良くしなければならない現代社会は、われわれに人間の本性に反した不自然な無理を強いているということもできる。実際、多くの人が仕事上の対人関係や学校での友だち関係が原因

でさまざまな心理的・精神的な不調に陥っているのが現代の日本の姿である。私たちは、長い歴史の中ではきわめて特殊な様相を呈している現代社会のもとで、生物としての本性に反した無理をして、初対面の人と仲良くしているのかもしれない。発達障害のある人たちは、現代の多くの人たちが社会の求めに合わせて覆い隠している人間本来の生物学的なアフォードンスを、しっかりと知覚している人たちである可能性がある。

3) 災害時のアフォードンス：以上のように見えてくると、発達障害のある人たちは、多数派の価値観が支配する社会が知覚することを求めるアフォードンスに合わせることをせず、多数派と同じ環境のなかにながら、発達障害の認知特性に基づいて、多数派とは異なる自分独自のアフォードンスを知覚している人たち

とみなすことができる。このような知覚のあり方は、多数派の価値観が支配している社会のなかでは、日常的に生き難さを感じやすいといえることができる。しかし、日常の価値観が崩壊する事態が生じたときには、状況が変化する。

昨年3月11日に発生した東日本大震災後、独立行政法人国立精神・神経医療研究センターの公式ホームページに、『発達障害児をもつ保護者の方へ』と題したメッセージが掲載された(稲垣・林、2011)。そこには、「災害時に最も支援を必要とするのが、環境の変化に弱い発達障害児である」という大方の先入観を覆す内容が記された。

その一部を抜粋して資料1に示す。メッセージが伝える重要なポイントは、「発達障害児を、災害時に全面的な支援を必要とする弱い存在にとらえる必要はない」ということである。メッセージには、衣食住と保護者の心理的安定を確保することの重要性、子どもに笑顔で接することの大切さ、周囲に子どもの特性を伝えることの大事さなど、発達障害児と保護者に配慮すべき点についても丁寧に記されているので、ぜひ全文をご参照いただきたい。そのうえで、このメッセージが示すのは、以下のような視点である。

多数派の価値観が支配する社会では、発達障害児は日常的に生き難さを感じなければならない。なぜなら、日常生活の中では、社会的なルールや習慣、周囲との関係の持ち方など、生活全般におよぶ環境内のアフォーダンスが、すべて多数派の人に利用しやすいように構築されているからである。そのような環境の中で、発達障害児が自分独自のささやかなアフォーダンスを確保しようとしても(前出のソファーの下にもぐりこむGrandinの行動を参照)、多数派の目に問題行動と映れば、その行動は禁止されることが少なくない。それは、生きていくうえで欠かせない命綱を断ち切られるような、まさに災害と同様の経験であると考えられる。日常的にそのような経験を繰り返し強いられているからこそ、災害時のように日常を支配していた価値観が崩壊して、すべての人がゼロから環境内のアフォーダンスを探索しなければならなくなったとき、発達障害児の力が発揮されるというのである。実際、東日本大震災直後の、宮城県で被災された自閉症児の家族の実体験の報告では自閉症の子ども達が驚くような役割を果たし、家族から頼りにされた様子が示されている(高橋、2011)。また、このメッセージを作成した林も、被災地で発達障害のある子どもとその家族の支援にあたった東北大学の田中(2011)から、

災害直後に発達障害児が実に生き生きと活動していたという報告を受けている。そうした発達障害児の姿は、災害から時間が経過して、被災地に多数派のルールが戻ってくるに従って、見られなくなっていったという。

#### IV. まとめ

本論文では、Gibsonの知覚理論と関連付けながら、発達障害の知覚世界について考察を行った。その内容が全体として示すのは、発達障害とされる人が、発達障害のない人と比べて、認知や行動に異常があるとする視点は何らの根拠がなく適切ではないということである。発達障害がある人は、発達障害のない人が概念のフィルターを通してしか見ることができないために見落としている実に多くのことを見ている可能性がある。また、環境の中に、発達障害のない人が知覚し得ない、実に多くのアフォーダンス(意味や価値)を見出していると考えることが可能である。

発達障害のある人の視点やアフォーダンスの知覚は少数派のものである。しかし、Gibsonがいうように、環境の中に何を見てどのようなアフォーダンスを知覚するかは主体によって異なるのが当然のことなのである。少数派の視点や知覚であるからといって、劣っていると考えたり問題であると思ったりするのは不適切であり、そのような見方は多数派の数に任せた傲慢というべき視点であろう。発達障害のある人に支援が必要だとすれば、それは発達障害とされる人たちの視点や知覚が多数派の価値観の中で一方的に否定され、そのことから生きにくさを強要されているからだといえることができる。

Gibsonの知覚理論では、知覚のあり方を探索し理解するあらゆるプロセスに、1人1人の人間やそれぞれの動物の個としての主体性を取り戻すことができる。そこには、視覚認知や環境知覚の優劣は存在しない。1人1人の人間が、あるいはそれぞれの動物が、他者とは異なる視覚世界を持ち、それぞれに独特なアフォーダンスを環境の中に見出しながら、1つの環境を共有して生活することを認めるのがGibsonの知覚理論の決定的な新しさである。

本論では、発達障害の人たちの知覚特性がGibsonの知覚理論で示された世界観と親和性が高いことについて、いくつかの視点から指摘した。一方、多数派が支配する現代社会のもの見方は、Gibsonの知覚理論とは対極にある固定的で硬直化したものであり、結

果的に社会全体には閉塞感が充満している。発達障害の人たちの知覚世界を、発達障害のない人の知覚世界と対等に並び立つものとして理解し尊重する姿勢をもつことにより、社会の閉塞感を打破する視点が見えてくるよう思えてならない。

## 文献

- Gibson, J. J. (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.  
『生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る』古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻=共訳(1985), サイエンス社.
- Grandin, T. & Johnson, C. (2005). *Animals in Translation. Using the Mysteries of Autism to Decode Animal Behavior*. c/o The Garnet Company. 『動物感覚 アニマル・マインドを読み解く』中尾ゆかり=訳(2006), NHK出版.
- Grandin, T. & Scariano, M. M. (1986). *Emergence: Labeled Autistic*. Arena Press. 『我、自閉症に生れて』カニングハム久子=訳(1993), 学習研究社.
- 稲垣真澄・林 隆(2011). 『発達障害児をもつ保護者の方へ』独立行政法人 国立精神・神経医療研究センターHP (2011年12月17日検索)  
[http://www.ncnp.go.jp/pdf/mental\\_info\\_handicapped\\_child\\_guardian.pdf](http://www.ncnp.go.jp/pdf/mental_info_handicapped_child_guardian.pdf)
- 河野哲也(2005). 『環境に拓がる心』勁草書房.
- 日本自閉症スペクトラム学会(2005). 『自閉症スペクトラム児・者の理解と支援 -医療・教育・福祉・心理・アセスメントの基礎知識-』. 教育出版.
- 佐々木正人(2003). 『レイアウトの法則 アートとアフォーダンス』. 春秋社.
- 高橋みかわ(2011). 『大震災 自閉っこ家族のサバイバル』. ぶどう社
- 田中真理(2011). 私信.